

大阪商業大学学術情報リポジトリ

「清滝や波にちり込青松葉」再考 —「難波の枯葉」との関連について—

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2023-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 敏, ISHIGAMI, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1663

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「清滝や波にちり込青松葉」再考

—「難波の枯葉」との関連について—

- 一、はじめに—延宝五年の芭蕉
- 二、「あすは粽」—西行・能因とのかかわり
- 三、「難波の葦」と芭蕉
- 四、「難波の枯葉」—『万葉集』とのかかわり
- 五、「清滝や波にちり込青松葉」
- 六、「青松葉」の意味
- 七、おわりに

石上敏

一、はじめに—延宝五年の芭蕉

延宝五年（一六七七）に成った『六百番誹諧発句合』に載ることから、それ以前の作とされる芭蕉の発句がある。^①

あすは粽難波の枯葉夢なれや

延宝五年といえ、芭蕉は三十四歳。寛文十二年（一六七二）、伊賀上野菅原神社に『貝おほひ』を奉納し、二十九歳で江戸に出府してから五年後に当たる。また、晴れて俳諧宗匠の立机をした年とされる。北村季吟より『埋木』の伝授を受けたのが延宝二年であり、それから三年という年月を過ごしてのことであった。

その間、延宝三年には西山宗因を江戸に迎えた百韻に初めて桃青の俳名を用いて参加し、杉風・嵐蘭・其角などに後に蕉門の代表的な門人となる面々が相次いで入門している。翌四年には素堂と詠んだ『江戸両吟集』が出版の運びとなり、その間にも宗信編『千宜理記』（発句六）、露沾編『五十番句合』（発句二）、蝶々子編『当世男』（発句三、付句三）、季吟編『続連珠』（発句六、付句四）に入集するなど俳諧師としての足固めを着々と進めている。

このように延宝五年というのは芭蕉にとって思い出深い年であったと思われる。ただし経済的にはまだ難しく、この頃から神田上水の水道工事に携わったと伝えられる。許六の『風俗文選』には「嘗世為遺功。修武小石川之水道四年成」（嘗て世に遺功を為す。武（武蔵国）小石川の水道を修し、四年にして成る）と記されており、現在知られる限り、これが同時代唯一の証言である。その後、蓑笠庵梨一や喜多村節信が聞き書きとして記しているが（傍線引用者）、疑わしい部分も含まれる。

梨一かつて東都にあそぶ間、本船町のうち、八軒町といふ処の長ト尺と云俳士に交る事あり。彼者語りけるは、我父も、ト尺を俳名として、其比は世に生る人もありき。一とせ都へのほりし時に、芭蕉翁に出会て東武へ伴ひ下り、しばしがほどのたつきにと、縁を求めて水方の官吏とせしに、風人の習ひ、俗事にうとく、其任に勝へざる故に、やがて職をすてて、深川といふ所に隠れ、俳諧をもて世の業となし申されしと、父が物語を聞ぬと。
 （蓑笠庵梨一『奥細道菅孤抄』芭蕉翁伝）

桃青江戸に来たりて、本船町の名主小澤太郎得入（宝永六年十二月二十四日没）が許に居れり。日記などかかせたるが多く有しと也。其頃の事にもあるにや。水道普請にかゝれる事見えたり。そのかみ神田、玉川両水道ともに、町年寄支配なればさやうの事工夫者なりしかば、こころみに差図を計はせしなるべし。役所日記延宝八年六月町々へ触れ書きあり。
 （喜多村節信『筠庭雜録』、括弧内は割注）

水道普請に関しては、許六の記す「修武小石川之水道四年成」すなわち小石川の水道を修める（修築する）こと四年にして成るといふ辺り

までを信じておくべきであろう。梨一が記す「(京都で)芭蕉翁に出会って東武へ伴ひ下り、しばしがほどのたつき(生業)にと、縁を求て水方(水利)の官吏とせし」という経緯は、さすがに信じがたい。当世の随筆類に散見される、有名人とのかかわりを誇大に述べた類と思われる。⁽⁷⁾これに対して喜多村節信(筠庭)の「水道普請にかゝれる事見えたり」とは、『風俗文選』のことを指すのだろう。博覧強記のこの人のこと、「宝永六年十二月二十四日没ス」という忌日まで付した「本船町の名主小澤太郎得入が許に居れり」という情報は信憑性が高い。続く「そのかみ神田、玉川両水道ともに、町年寄支配なればさやうの事工夫者なりしかば、こころみに差図を計はせしなるべし」との記述は、「なるべし」と伝聞推定でもあり、そのようなこともあつたかもしれないという程度に受け止めておきたい。

西山宗因も元々は熊本藩主加藤家の家臣である加藤正方に仕え、寛永九年(一六三二)の主君改易で浪人になったものの、正保四年(一六四八)に大坂天満宮連歌所の宗匠となる一方で俳諧の素養を積んだのであり、北村季吟にせよ、家業である医術に携わり、元禄二年からは歌学方として子の湖春とともに五百石で幕府に仕官している。連歌とは異なり俳諧の場合、いかに著名な宗匠であつても、そのみで生活していったのは、ほんの一握りの人だけで、多くは生業や副業を持つことが未だ一般的であつた。⁽⁸⁾

芭蕉における延宝五年とは、そのような年であつた。年末には風虎編の前掲『六百番俳諧発句合』に二十句が入集し、掲出句「あすは粽難波の枯葉夢なれや」は、その中の一句である。立机は年初のことであつたから、この年の立机のあと仲夏五月の節句前日に詠んだ発句が年末の句集に収められたという経緯ではなかつたか。

筆者は先に「芭蕉最晩年の難波の句」という小論を草し、「あすは粽難波の枯葉夢なれや」は「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」以上に、その翌日(逝去三日前の十月九日)に芭蕉が詠んだ(改訂した)とされる「清滝や波にちり込青松葉」との関わりが深いという見通しを述べた。本稿では、その理由や背景を可能な限り詳細に論じていきたい。⁽¹⁰⁾

二、「あすは粽」——西行・能因とのかかわり

この発句は、元禄七年(一六九四)十月八日、逝去四日前に芭蕉が詠んだ「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」との関係で論じられることがあつた。⁽¹¹⁾この年芭蕉は九月八日に郷里伊賀上野を出発し、翌日高津(現・大阪市中央区)に着いてから病状が悪化して、そのまま大坂(南御堂花

屋仁右衛門方の貸座敷）で帰らぬ人となった。「あすは粽」も「旅に病て」も、いずれも大坂に関わる発句であることに加え、「夢」や「枯」といった用字が一致することからも、「夢は枯野をかけ廻る」の「夢」は、芭蕉がかつて詠んだ「難波」の「夢」と関わっている可能性があると考えられたのである。また、「あすは粽」は芭蕉が生涯敬愛した西行の和歌を踏まえて詠んだ句であり、その最晩年にも芭蕉は西行との紐帯を強く意識していたことから両句には結びつきがあったと考えられる¹²⁾。

翌日の菖蒲の節句に向けて前を向き、意を決するような勢いのある初句「あすは粽」に対して、中七・末五はいささか趣を違える。「難波の枯葉」は「夢なれや（夢なのだろうか）」というのだが、これは『六百番誹諧発句合』の季吟の判詞に「西上人のなにはの葦を佛おもかけにして、あすのかれはを想像たる」とあるように、西行の「津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風渡るなり」（『新古今集』）を踏まえている¹³⁾。そして季吟は、「難波」といえば「葦」という連想が成立している歌の世界を相手取り「あし」ではなく「あす」と詠んだところに芭蕉の創意を認めている。さらに西行歌の本歌である能因の「心あらむ人に見せばや津の国の難波あたりの春の景色を」（『後拾遺集』）をも視野に入れるとの指摘があるように、「あすは粽」は能因歌を逆転させ、摂津難波の春の景色のなかに枯葉の風景を夢想するという発句である。

「あすは粽難波の枯葉夢なれや」が詠まれた延宝五年（一六七七）は、既述の通り芭蕉の江戸出府から五年後、この年または翌年に芭蕉は立机したと考えられる。翌年の立机であれば『六百番誹諧発句合』の出版直後であった。右に見た通り着々と業績を積んできた芭蕉ではあるが、この頃から神田上水の仕事に携わるなど、俳諧だけでは暮らしていけない状況下にあった。延宝四年（一六七六）には、出府以来二度目の帰郷をし、甥（養子）の桃印とういんを連れて江戸に戻り、翌年春、三年前の『埋木』伝授から満を持しての立机（文台開き）であったと考えられる¹⁴⁾。立机披露の折には興行を催したであろうが、その詳細は不明である。いずれにせよ、立机前後に詠まれたのが「あすは粽難波の枯葉夢なれや」という発句であった。

延宝六年（一六七八）の三月に、芭蕉は信徳・素堂とともに『江戸三吟』を上梓している。百韻の三巻本であり、荒木田守武の『俳諧独吟百韻』以来、独吟百韻は俳諧師として独立するひとつの指標であった。芭蕉の文台開きについて、その詳細は伝わらず万句合せ興行の記録も残らないが、延宝四年の『江戸両吟集』をその前触れとして、同五年の『芭蕉杉風両吟百韻』と、この『江戸三吟』は宗匠としての成果を披露するものではなかったか。延宝四年まで、せいぜい数句の入集に限られていた芭蕉が『六百番誹諧発句合』では二十句、翌六年の二葉子編『江戸通り町』には歌仙一卷と付句五句、不卜編『江戸広小路』には発句十七句と付句二十句と多くのスペースを得るようになった。それは実力の向上と周囲の信頼もさることながら、宗匠となった芭蕉への執り成しであったかと考えられる。延宝七年の歳旦「発句なり松尾桃青宿

の春」に対して、同六年の歳旦句は伝わらないが、以上のような流れから延宝五年には芭蕉が立机していた可能性が高いと考えられる。粽(千巻)に用いる青葉から枯葉を想像するところに、若き日の芭蕉にすでに侘びの萌芽が見て取れると書けば、いかにも予定調和であるが、芭蕉はこの発句を長年自らの内に温め続けたようである。というのも、芭蕉が最後に詠んだ(改訂した)句が、まさにこの「あすは粽難波の枯葉夢なれや」に対する返事のごとくであったからである。

清滝や波にちり込青松葉

清滝とは京都桂川(大堰川)支流の清滝川のこと、本来は同じ年(元禄七年)の夏の落柿舎滞在時に詠んだ「清滝や浪にちりなし夏の月」または「大井川浪に塵なき夏の月」という発句を、おそらく逝去三日前の十月九日に改訂したものである。「おそらく」というのは、この改訂を芭蕉が伝えた最初の相手が去来であり、その日付は十月七日から九日までの三日間のどこかであったということしかわからないからである。当初の句形は、この改訂について記す支考(『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』)と去来(元禄八年一月二十九日付許六宛書簡、『旅寝論』『去来抄』)とで異なっているが、最終的に「清滝や波にちり込青松葉」の形で落ち着いている。後年の去来の回想(『去来抄』)によれば、その「原稿」は野明のもとにあったというので、芭蕉が嵯峨の落柿舎に滞在していた同年閏五月二十二日から六月初旬までの発句と確認できる。そうであれば五月の詠である「あすは粽難波の枯葉夢なれや」と季節が重なる。そのうえ、ほとんどの植物の葉が秋から冬にかけて散るのに、松の葉は新芽の生長を待つように冬を越して夏に散ることから、夏に枯葉を想う「あすは粽」が季節をまたいだ発句であることと重なる。さらに、当初は「夏の月」であった結句を、芭蕉は冬に「青松葉」へと詠み変えたのであった。このように、「清滝や波にちり込青松葉」は複雑に季節をまたいだ発句であり、その意味で「あすは粽難波の枯葉夢なれや」と句想が重なることを確認しておきたい。

「あすは粽」は、先述の通り「清滝や」の前日に詠まれた「旅に病て」との関わりが指摘されてきた。「清滝や」は、より正確には去来が芭蕉の病臥する南御堂の花屋を訪れた九月七日から支考が改訂のことを芭蕉に聞いた九日までの間に改訂された。「旅に病て」は八日から九日にかけての深夜に詠まれたので、詠まれた(改訂された)順序が逆の可能性があるのだが、両句について記した最も詳しい支考の記録からは「旅に病て」が先(八日)、「清滝や」が後(九日)に詠まれた(改訂された)と読み取れるので、本稿でも、この順序で詠まれたものとして考察を進めてきた。

三、「難波の葦」と芭蕉

先述のように、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」を芭蕉の生涯の集大成すなわち辞世句であると説明するのに、三十四歳の芭蕉が俳諧宗匠として立机すると相前後して詠んだ発句「あすは粽難波の枯葉夢なれや」との関わりが挙げられる。これは西行の「津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風わたるなり」（『新古今集』）を踏まえた句であるが、最晩年の芭蕉が九月九日の重陽（菊の節句）に意識を注いでいたのに対して、西行歌は「枯葉」の季節に春を思う歌である。そして、「あすは粽」は五月五日の端午の節句を詠んだもので、季節は夏である。このように異なる季節を夢想するところに「津の国（撰津国）」の「あすは粽」を結ぶ「夢」の根柢があった。¹⁹

その一方で、「旅に病て」の「夢」は「枯野」の季節に限定される。すなわち「旅に病て」との関わりを論ずるのであれば、「あすは粽」はあくまでも一步退いたところから解釈されるべき発句である。確かに、俳諧宗匠として芭蕉が歩み始めた頃に詠んだ記念碑的な発句と呼ぶべきものが「あすは粽難波の枯葉夢なれや」であった。しかし、これは江戸に居て難波の葦の枯葉、難波の夢を詠んだ句であった。それに対して「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」は、難波に居て難波の夢を、そしておそらく河内の旅を詠んだ句である。いずれも五節句のひとつづつを詠んだ発句であり、その点に関連を求めることはできるが、「あすは粽」では盛夏を迎えた五月五日の菖蒲の節句を詠んでいるのに対して、「旅に病て」では長寿を願う九月九日、すなわち晩秋の菊の節句（重陽）に徴した菊の不在を詠んでいる。重陽の句境に居るままに九月（秋）から十月（冬）へと至った芭蕉が詠んだ、新句としては最後の発句であった。²¹

重陽の節句もしくは大坂での病臥以来、西行をはじめとする詩歌の先達との紐帯にすがって最晩年の日々を過ごしていた芭蕉である。²⁰ かつて俳諧宗匠の第一歩を記した江戸での日々、西行を意識しつつ詠んだ難波（大坂）で末期を迎える覚悟を固めた芭蕉が「あすは粽」の句を思い浮かべたとしても不思議ではない。むしろ、立机以来十七年間という自ら歩んだ俳諧の円環を今まさに閉じるに当たって、「難波の夢」を盛り込んだ句を詠もうと考えるのは自然なことであろう。ただ、かつて三十四歳の芭蕉（桃青）が詠んだのは、詩歌の世界の中で難波の象徴とされる「葦」の句であった。²³ そうであれば、いかにそれが「枯葉」であっても「枯野」とは異なるものである。²⁴

八十島時代の茅渚の海（大坂湾）に自生していた葦の群落は、芭蕉の頃にはすでに大坂を象徴する風景といえるほどには繁茂していなかった。葦原の多くは干拓されて新田等と化し、葦の多くは内陸部で計画的に生産される葦簀や茅葺（屋根）あるいは敷草（肥料）などの商品原料となっていた。

逝去までの一月余り、とりわけ十月五日に御堂筋の花屋に移るまでの二十五泊を、芭蕉は車庸邸への一泊以外は上町台地の高津にある酒堂邸と道修町にある之道邸、すなわち内陸部で過ごした。そこからの外出は、十三日の住吉、十四日の畦止亭、十九日の其柳亭、二十一日の車庸亭、そして二十六日から二十八日までの晴々亭(浮瀬)、園女亭、畦止亭への計七回六か所であった。これらの中で、知られる限り最も海に近いのは住吉である。

『万葉集』の伴家持の歌に「海原のゆたけき見つつ葦が散る難波に年は経ぬべく思ほゆ」とあるように、海水にも生育することで知られる葦が、当時住吉大社の目前にあった住之江に「枯野」と呼ぶべき群落をつくっていた可能性もある。「難波の葦」という成語は、周知の通り「伊勢の浜荻」と続くのであり、その源流は平安末期の「住吉杜歌合」に藤原俊成が「難波の方ではあしとだけ言ひ(中略)伊勢志摩では、はまをぎと名づけられている」(意訳)と記したことにあるとされている。つまり、住吉大社こそは「難波の葦」という歌語(歌枕)の起源となる地であった。ただし、芭蕉は住吉の升市を見物中に体調が悪化し、当日の句会を欠席している。そのような芭蕉に海辺の枯葦を眺める余裕があったかどうかは分からない。

ここで歌枕としての「難波の葦」について考えておきたい。いうまでもなく、それは「葦」にかかわる歌枕の一種であるが、難波の他に「○○の葦」と地名を冠した歌枕はない。すなわち難波といえは葦、葦といえは難波と、少なくとも『万葉集』以来の歌枕において難波と葦は不可分であり、一対一の関係を有している。芭蕉と同時代を生きた鬼貫にも「枯葦や難波入江のささら波」(『大悟物狂』)がある。芭蕉句とのかわりで見に行けば、当面「枯葦」が注目される。葦枯る、葦の枯葉、枯葦原、寒葦なども詠まれるが、和歌に比して俳諧に多く詠まれたわけではない。ただ、「難波草」との異名があるように「難波の葦」は広く人口に膾炙した。また、「玉江草」も葦の異名であった。

月見せよ玉江の葦を刈ぬ先 (『ひるねの種』)

芭蕉が葦原を詠んだ発句は、この一句のみである。「おくのほそ道」の旅も終盤に近付いた元禄二年八月十二日、「葦刈」の歌枕として知られる越前の玉江で詠まれたと考えられている発句であるが、『おくのほそ道』には載らず、「玉江の葦は穂に出にけり」とのみ本文中に描写される。すでに指摘されているように「玉江漕ぎ葦刈り小舟さし分けて誰を誰とか我は定めん」(『後撰集』よみ人しらず)、「夏刈の玉江の葦を踏みしだき群れる鳥のたつ空ぞなき」(『後拾遺集』源重之)などと「玉江」は詩歌のなかでは専ら葦、それも葦刈りの風景とともに詠まれ

てきた。芭蕉句は、本来は秋（仲秋）のものである月見を、葦刈りの前に（葦の穂波が広がる頃に）しなさいと強い命令調で勧めた発句なのだが、重之の和歌に見るように玉江の葦刈りは夏のものであり、これでは夏（以前）に月見をせよと勧めていることになる。確かに刈入れのすんだあとの殺風景な葦原でする月見よりも、刈入れ前の葦の穂波と名月を取り合わせた風景の方に、より興趣を覚えるという指摘なのである。しかし、実際の季節の移りとの関係においては、この発想は無理が大きかったのかもしれない。そのために、『おくのほそ道』には取めなかったものかと考えられる。

対象を蕉門に広げて枯葦を詠んだ発句を探せば、芭蕉門人の關更（らんこう）と惟然（いぜん）に次の句がある。

枯葦の日にく折れて流れけり 關更（『有の儘』）
 枯葦や朝日に氷る鮓（はや）の顔 惟然（『藤の実』）

さらに後の時代では次の三句が管見に入る。素丸（そまる）は素堂の流れを汲む葛飾派に属し、芭蕉の顕彰につとめている。麦水（ばくすい）は支考門の美濃派から伊勢派に転じ、天明中興に邁進した。暁台（きょうだい）は蕪村との交友をきっかけに蕉風復古に努めた人である。

枯葦や夜々に折れ込む鴨の上 素丸（『素丸発句集』）
 枯葦や低う鳥たつ水の上 麦水（『葛籥』）
 青天に河辺の葦の枯葉かな 暁台（『あさかり』）

一方、「青葦」は「青葦原」や「葦茂る」などの季語とかわり、葦の生命力を表わす最も代表的な季語となった（『俳諧通俗誌』享保二年）。「葦茂る」は葦が池沼の岸辺に青々と生い茂っているさまを表わす夏の季語であり、「葦蟹」はその生い茂った葦の下に隠れた蟹、『万葉集』卷十六「隠（かま）りてをる葦蟹を」以来の歌語である。そもそも青々と茂る葦は「瑞穂」と並んで国の象徴とされていたのであり、自らの国を称して彼らは「豊葦原の瑞穂の国」（『日本書紀』）とすら呼んだ。葦が豊かに生い茂り、稲穂の実る風景が「国」の繁栄の象徴とされたのである。中世以降は「豊葦原」という言葉が歌語として用いられることはほとんどないが、それでも葦の風景が豊穡の象徴として詠まれることは長く

続いた。それに対する反指定が小野十三郎「葦の地方」によって謳われるほど、葦の風景は大きなアイコン（アイコン）として存在し続けたのである。²⁷⁾

これらに対して「葦刈（蘆刈）」は周知のように秋の季語、「稲刈り」のあとに続く「葦刈り」であるが、このように成句で呼ばれる歌語の「刈り」は、この二つしかない。年中行事として人びとに周知されていたのである。「葦鴨」は『万葉集』巻一「葦辺行く鴨の羽交に霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ」以来の冬の季語である。その他にも、葦の角、葦の花、葦火など、葦とかかわり、葦に由来する季語は少なくない。それらは歌や句に詠まれ続けることで、またそこから派生した能などの芸能や物語で芭蕉の時代まで（そして現代に至るまで）「葦」にまつわるイメージを人々の意識に植え付けてきたのである。

四、「難波の枯葉」——『万葉集』とのかかわり

先に見たように、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」の「夢」は「あすは棕難波の枯葉夢なれや」との関係によれば西行まで遡る「難波の夢」であり、西行歌は能因の「心あらむ人に見せばや津の国の難波あたりの春の景色を」に典拠をもつ。ただし、周知のように「難波の葦」は『万葉集』に載る笠金村の長歌さらには慶雲三年（七〇六）に志貴皇子が難波宮から大和を思つて詠んだ歌以来の歌枕であった。本節では、『万葉集』とのかかわりを中心に考察を試みる。²⁸⁾

芭蕉当時の大阪平野（河内平野）には、かつての河内湾由来の湖沼に加えて作物栽培のための溜池が散在し、多くの葦が繁茂する環境が遍在していた。芭蕉が断続的に外出した九月十三日から二十八日まで、西暦では十月三十一日から十一月十五日に当たる。現在、葦の花期は八〜十月頃とされるが、当時の気候に照らすならば、その頃すでに花は穂となり、茎は枯れていたはずである。現代の十一月上旬といえは、輸入植物や温室栽培によつて数多くの花が見られ、地球温暖化によつて花期も長く続いているが、当時は限られた花、たとえば残菊や遅咲きの山萩、葛などが咲いているにすぎなかった。むしろ寒牡丹や寒椿の花期に入っており、そこに葦や薄（尾花）などの穂がたなびいて、独特の風情を醸し出していたはずである。

西行が「津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風わたるなり」と『万葉集』以来の歌枕である「難波の葦」を詠んでいるのに対して、若

き芭蕉は「あすは粽難波の枯葉夢なれや」と詠んだ。つまり「難波」は詠んでいても「葦」は詠んでいない。「粽」「枯葉」という縁語から「葦」を導いているのであり、この点には注意が必要である。

「難波の葦」という歌枕の初出は『万葉集』巻六の九二八歌であり、それは「冬十月、難波の宮に幸しし時に、笠朝臣金村の作れる歌一首并せて短歌」として載る笠金村の長歌である。この九二八歌が、神亀二年五月の聖武天皇の吉野行幸で金村自身が詠んだ九二〇歌と対になっていることに注目したい。以下の論述のために九二八歌・九二〇歌の順に掲げる。

押し照る 難波の国は 葦垣の 古りにし郷と 人皆の 思ひ息みて つれも無く ありし間に 積麻なす 長柄の宮に 真木柱 太高敷きて 食国を 治めたまへば 沖つ鳥 味経の原に もののふの 八十伴の緒は 慮して 都なしたり 旅にはあれども

あしひきの み山もさやに 落ち激つ 吉野の川の 川の瀬の 清きを見れば 上辺には 千鳥数鳴き 下辺には かはづ妻呼ぶ もしきの 大宮人も をちこちに 繁にしあれば 見るごとに あやに羨しみ 玉葛 絶ゆること無く 万代に かくしもがもと 天地の 神をそ祈る 畏くあれども

これらのうち前者が神亀二年（七二五）の冬十月、後者が同年夏五月に同一人物によって詠まれた歌であったことには注意すべきである。なぜならば、芭蕉の「清滝や」の句が元禄七年（一六九四）の五月に詠まれ、十月に改訂されているからである。もちろんこれは仕組んで得られる月次ではないが、このように月立てが重なることは、いかに重病の芭蕉であっても気が付いていただろう。九月二十九日以降、作句のなかった芭蕉が、十月八日に至って「旅に病て」の句作に至った背景に、このような経緯があったのではないかと推定することで芭蕉の最晩年はまた異なる相貌を見せる。すでに芭蕉は十月五日以降、難波で客死することを覚悟していたはずであり、それまでの句作における「難波」とのかかわりを思い返さないということとはなかっただろう。もちろん芭蕉は自らを笠金村になぞらえようとしたわけではあるまい。若き日に自らが詠んだ「あすは粽難波の枯葉夢なれや」の来歴をたどれば、敬愛する西行や能因を経て笠金村にまで遡る。そのように悠久たる詩歌の歴史の中に自らの俳諧宗匠としての生涯が位置づけられることに、ほかならぬ難波に居つつ感慨を新たにしたものと思われる。

前者は二十一句、後者は二十三句から成る、ほとんど同一の構造をもつ長歌であるが、問題は以下の部分である。

「押し照る 難波の国は 葦垣の 古りにし郷と 人皆の 思ひ息みて(略) 沖つ鳥 味経の原に もののふの 八十伴の緒 廬して 都
なしたり 旅にはあれども」

「あしひきの み山もさやに 落ち激つ 吉野の川の 川の瀬の 清きを見れば(略) 玉葛 絶ゆること無く 万代に かくしもがもと
天地の神をそ祈る 畏くあれども」

いずれの長歌も全体の序とすべき最初の六句で、詠まれる場所の指定がなされる。前者は葦垣が古くから有名な郷(里)と誰もが思いや
すらう難波の国、後者は山から落ちてたぎる川瀬(川面)も清き吉野川である。そのような前提を提示したあと、それぞれの場所を統べる治
世の根拠と呼ぶべき具体的な情景を描き出し、それらを治める聖武天皇の徳を示した中略部分を経て、まとめの形で自然を称えることによ
て治世の永続を言祝ぐ(ことほ)末尾七句で締めている。⁽³³⁾

さらに絞れば、これら二つの長歌では「葦垣の古にし郷」である「難波の国」と「吉野の川の川の瀬の清き」とが対比的に詠われていて、
結句は「旅にはあれども」「畏くあれども」と、いずれも「あれども」という継続を示す否定句で終わっている。「なのだけれども」と余韻を
持たせ、聴き手たちを歌の世界に立ち止まらせる。このように、「古にし郷」である「難波の国」と「川の瀬の清き」を詠んだ両歌の歌の心は、
次の両句につながっているとはいえないだろうか。

あすは粽難波の枯葉夢なれや

清滝や波にちり込青松葉

繰り返すが、前者は俳諧宗匠として立机した頃の芭蕉が、夏の節句を控えつつも冬の景色を想起する発句であり、後者は最晩年に当たる元
禄七年の夏に詠んだ句を、その年の冬十月に至って改訂した発句である。場所としては、江戸にいなながら難波の葦の枯葉を詠った前者に対し
て、志貴皇子が難波から大和を偲んだように難波(大坂)にいつつ京都の清滝川を思う後者である。これらから「あすは粽」の「夢」は時間的
なものであるとともに空間的なものでもあるといえる。むしろそのような時間や空間の距離を埋める媒介として「夢」があった。これから俳
諧の海に専門職として乗り出そうという若き芭蕉が、西行をはじめとする多くの歌人たちを介して古代にまで遡る「難波の葦」を、まだ見ぬ難
波という土地を遠く離れた場所に居つつ節句前日という境界から夢想する、そんな時間と空間の靈妙さを詠んだ発句であったと考えられる。

最晩年の芭蕉は、すでに「川の瀬の清き」吉野川を訪れており、「葦垣の古にし郷」である難波の風景も見知っていた。そして、そのような難波に居て、今まさに旅の一生を閉じようとしている。「玉葛 絶ゆること無く 万代に かくしもがもと 天地の神を祈る」というのは、はからずも芭蕉の旅の本質であったわけだが、この時の芭蕉を一言で言い表わす言葉があるとすれば、それはまさに「押し照る 難波の国は葦垣の 古りにし郷と 人皆の 思ひ息みて」と詠い出した九二八歌の結句「旅にはあれども」である。「旅に病て」という句が「あすは粽とかかわるというのであれば、私は、このことこそがその最大の要素であると考ええる。

笠金村が「沖つ鳥 味経の原に もののふの 八十伴の緒は 廬して 都なしたり」と詠んだ難波宮は、芭蕉の時代に至るまでに日本全国のどこよりも「もののふの 八十伴の緒は 廬して」と呼ぶべき場所となっていただけでなく、そのことによって「都」であることを阻まれていた。いうまでもなく、豊臣秀吉による大坂城築城と、大坂の陣による豊臣氏の滅亡によってである。「兵どもが夢のあと」と詠った芭蕉が、その生涯を通じて、破れ去った武將たちに心を寄せていたことを赤羽学氏が詳細に説かれている。⁽³⁶⁾ 大津の義仲寺に葬ってほしいと願ったのも、決してその場の思いつきではなかった。長い期間を経て、芭蕉は武將に、それも敗者に深い感慨と親近感を抱き、自らの生涯を彼らの境遇や運命に重ねて生きようとしていた。

このように、『万葉集』に載る笠金村の二首、難波と吉野川を詠った同一年次の二つの長歌は、本来は天皇賛歌として詠まれながらも、その範疇にとどまることなく雄大で霊妙な自然を詠う「土地褒め」の歌として存在した。すなわち、これらは「土地への挨拶」の先蹤として芭蕉の記憶にとどめられていたことだろう。⁽³⁶⁾ 「難波の葦」は直接的には西行の「津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風わたるなり」という一首を介して芭蕉に届いたものであるが、笠金村の万葉歌は元禄七年十月という芭蕉にとっての最後の年、最後の月に至って「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」「清滝や波にちり込青松葉」という二つの発句を芭蕉に詠ませる原動力のひとつになったと考えられる。

この観点において「清滝や波にちり込青松葉」は、「清滝や浪にちりなき夏の月」または「大井川浪に塵なし夏の月」とはまったく次元を異にする発句であった。仮にそれが支考の証言のように等類を避けるために改訂されたものだとしても、この句を「新たな一句」と把握する（少なくとも、そのような視点を排除しない）姿勢で接する必要がある。⁽³⁷⁾

五、「清滝や波にちり込青松葉」

私は、先述の「清滝や波にちり込青松葉」考」と題した拙稿において、西行には「大井川」を詠んだ歌が二首あり、それらはいずれも「波」と「井堰」を取り上げたものであることに触れた⁽³⁸⁾。そしてそれらはいずれも大井川(大堰川)の名の由来ともなった井堰をくぐる波が障壁を越えてゆく「恋」に譬えられたものであった。田仲洋巳氏は「その発想の源として」と述べたうえで、

年を経て花の鏡となる水は散りかかれるを曇るといふらむ

という伊勢の和歌(『古今集』春上・四四)を取り上げ、草野隆氏の「清滝川の川面を鏡に見立てて、木の葉を、それを曇らすものと捉え」という説に対して、「しかしながら、何物かの影が流水に映るといふのは、王朝和歌においてしばしば見られる景の設定である。」と述べている。確かに水面を鏡に譬えることは和歌の伝統のうえでも決して珍しいことではなく、たとえば、藤原定家の子の為家も、端的に「水の鏡」と表現して紅葉の影が映る水の面を詠っている⁽⁴¹⁾。

散りかかる色だに飽かじもみじ葉の影見る方の水の鏡は

また、十五世紀に至って、連歌師の心敬が「水青し消ていくかの春の雪」に付した自注(『芝草句内岩橋上』)に、順徳院の「ちくま川春行く水はすみにけりきえていくかの峰のしら雪」(『風雅集』三六)とともに以下の西行歌を掲げている⁽⁴²⁾。

ふりつみしたかねのみゆきとけにけりきよ滝川の水の白なみ

漢字を用いて書き記せば、「降り積みし高嶺の深雪解けにけり清滝川の水の白波」となるだろう。

いうまでもなく、心敬は芭蕉が連歌師の最高峰として繰り返し称揚している宗祇の師である。芭蕉が心敬に対しても応分の敬意を払って

たことは、すでに数多くの指摘がある。⁽⁴³⁾たとえば、芭蕉が宗祇の「世にふるも更に時雨のやどりかな」をほとんどそのままに「世にふるも更に宗祇のやどり哉」と詠んで宗祇への限らない敬慕を表わしたことは広く知られるが、その宗祇が依拠したのが心敬の「雲はなほ定めある世の時雨かな」であった。『新撰菟玖波集』に「心敬応仁のころ、世のみだれ侍りしとき、あづまにくだりてつかうまつりける」、「おなじ比、信濃にくだりて時雨の発句に」と並べて掲げられることで両句の関係は人口に膾炙した。

定家は、『順徳院百首』で西行の掲出歌に対し「西行法師が清滝川、うるせく仕り候。年来思し給ひ候」としたうえで、順徳院の「ちくま川」を「春行水はすみにけり消えていくかの峰のしら雪、美麗の姿、その隔てに候けることを誰もつかうまつらず候、おもしろく候」と、西行歌の上を行くものとして称賛している。

「うるせく」は、「うるせし」の連用形である。(一)頭の回転が良い、気が利いている、利発だ、賢い、(二)技能などがすぐれている、じょうずだという二様の意味があり、(一)から、(三)うるさい、煩わしいという意味が派生したとされているが、(一)に限らず、(二)からの派生と考えてもよいだろう。つまり、頭の回転が速く気が利いているゆえにかえって煩わしく思う、あるいは相手の技能が優れているために自分自身と比べて煩わしく思うということが考えられる。定家にとつて、西行の「ふりつみしたかねのみゆきとけにけりきよ滝川の水の白なみ」には技量に優れているがゆえに、かえって煩わしく感じられる要素があったようである。先ほどの(一)の用例として『大辞泉』は「才かしく、心ばへもうるせかりければ」(『宇治拾遺物語』巻十)を、(二)の用例として「宮の御琴の音は、いとうるせくなりけりな」(『源氏物語』若紫上)を挙げているが、用例としては(二)のほうが、この場合の「煩わしい」に直結しているように思われる。

このように「うるせし」には讃嘆と敬遠という両面的な要素が微妙に混在していたことがわかる。そう感じる当の本人にも、どちらなのか見分けがつかないこともあったに違いない。定家が西行歌を評価した「うるせく仕り候。年来思し給ひ候」という評言も、表向きには「上手に詠んでいると長年思ってきた」という意味でありつつ、それゆえに定家は順徳院の歌を推すのである。それも、川の水が澄み切って「美麗の姿」になるためには、山に降り積もった雪が消えて（地中に浸み込んで）しばらくしてからでなければならぬと詠ったのは西行の創見であり、それまで誰も詠んだことがなかったと述べた上で、そのことが「おもしろく」の最大の根拠であるとしている。伊藤伸江氏⁽⁴⁴⁾によれば、これに乗じたのが今川了俊であり、『落書露顯』によれば西行の歌に「のりて」、「心の今一重出来たる」のが順徳院の「ちくま川」の歌であった。これらに対して西行の「ふりつみし」を最大限に評価するのが、心敬と同時代の歌人である東常縁⁽⁴⁵⁾の『新古今和歌集聞書』であった。常縁は「清滝と取出して結句は水の白波といへる賢作なり」として、「その故は」と評価の理由を述べている。

ところで、前掲の西行歌「ふりつみしたかねのみゆきとけにけりきよ滝川の水の白なみ」であるが、管見の及ぶ限りで従来指摘されたことではないのだが、これは、芭蕉の「清滝や波にちり込青松葉」(初案「清滝や浪にちりなき夏の月」)の先蹤とは言えないだろうか。言いかえれば、芭蕉は西行の二つの歌を意識しつつ、元禄七年の夏五月に「清滝や浪にちりなき夏の月」と詠んだ。そして、その年の九月二十七日に「白菊の目に立て、みる塵もなし」と詠んだことで、「清滝や」の「ちりなき(塵なし)」とのあいだに等類が生じ、「清滝や」を改訂する必要に迫られた。そこで「ちりなき」を「ちり込」へと変更し、「夏の月」を「青松葉」へと詠み変えたというのである⁽¹⁶⁾。

以上のように、西行には大井川(大堰川)だけではなく、清滝川を詠んだ歌があり、それは歌人や連歌師たちによって繰り返し論評の対象とされてきた。当該歌は『山家集』にこそ収められなかったものの、芭蕉は目にするものがあつただろうと推定できる。定家・常縁・心敬が取り上げたことにより、そのように考えて間違いないと思われる⁽¹⁷⁾。なかでも『順徳院百首』における定家の評語には、「ふりつみしたかねのみゆきとけにけりきよ滝川の水の白なみ」を「西行法師が清滝川」と呼んでおり、芭蕉は定家―西行のラインからこの短歌を受け取ったものと想定できる。すなわち「清滝や波にちり込青松葉」を、このラインに沿って考察することには十分以上の理由があり、意味があるということになる。以上をふまえて、改めて「清滝や」を含めた三句を対照してみたい。

あすは粽難波の枯葉夢なれや

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

清滝や波にちり込青松葉

いずれも初句切れの三句であるが、同様に上五(上句・初句)と中七(中句)・下五(下句・結句)とのあいだに時制の変化がある。「あすは粽」は上五が未来、そしてと中七・下五で過去(過去を包摂した未来)を詠んでいる。「旅に病て」は上五が過去、中七と下五は未来を展望した過去と現在を詠んでいると言える。そして「清滝や」は全体で現在を詠みながら、中七と下五で未来を展望している。以上見てきたように、「旅に病て」や「清滝に」を詠んだ(改訂した)最晩年の芭蕉が「あすは粽」に思いを致すことがあつたのだとすれば、それは第一に「あすは粽」という明確な未来に向けての展望をこの発句が謳っていたからではないだろうか。もちろん、そこに詠まれた「難波」で生涯を閉じるのであるという静かな諦観が、芭蕉の俳心のなかにこの発句を引き寄せたという経緯はあつたのであるうけれども。

六、「青松葉」の意味

「浪に塵（ちり）なき（なし）」は、西行の「目にたて、みる塵もなし」を典拠としてみるとされるが、塵ひとつないかのように澄んだ清滝川（大井川・大堰川）の水面を表現していることも事実である。つまり、改めて考えてみるならば、「浪」と「ちりなき（塵なし）」とは明らかに形容矛盾である。そもそも「鏡のように水平かつ清明で塵ひとつない」という西行の比喩が「塵なし」という表現の根幹だったのであれば、そのことと「浪（または波）」のイメージとは明らかに背馳している。仮にこれが「波がない」という表現であれば、鏡のように風いだけ清い川面に夏の月が映るといふ形で両者はつながるものの、いかに「塵なき」浪であっても、その浪に夏の月が映っているというのは無理があるのではないか。とはいえ芭蕉のことであるから、それまで誰も構想し表現できなかった「ひとつも塵がないほどに澄み切った浪」という表現に挑んだ可能性が絶対にはいえない。しかし、そうであれば後進の誰かがそれに気づき、そのような趣向を継承した表現を試みていたのではなかったか。ところが、そのような事例は知られていない。そこで、次のことが考えられる。それは、「清滝や浪にちりなき夏の月」というのは「清滝川に映った夏の月は浪によって散り散りになることなく」という意味であって、「塵」とは関係がないという可能性である。つまり、この場合には支考の記した「大井川浪に塵なし夏の月」という句形は存在し得ないという可能性が高い。

芭蕉の最晩年に関しては、周知の通り支考が記録した二つの日記（『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』）と、支考からの伝聞を中心とした其角の『枯尾華（芭蕉翁終焉記）』、やはり支考の伝聞に自らの見聞を加えた路通の『芭蕉翁行状記』の他に、去来の『旅寝論』や『去来抄』が知られているに過ぎない。これらに、多くは直接的な見聞を欠いた後代の記録が加わって、芭蕉評伝の時代が訪れるというのが大筋の流れである。しかし、その根幹をなす支考の記録は信じるに値しないという評価が芭蕉逝去の直後から繰り返されており、支考の記録を眉に唾つけて読む人を漸増させてきた。ただし、その根拠は支考の人間性に問題があるからという、とりわけ芭蕉逝去以降に語られるようになった人物評価が中心であった。実際に支考の記録を精査した先例は少ない。しかし、支考の記録は考えられているより信頼できるといのが現時点での私の感触である。ここでは、そのことを述べている余裕はないので、そのような事実があるということだけを述べるにとどめる。

芭蕉の発句に関して言えば、支考のみが記した「大井川」で始まる改案は、存在した可能性が低くない。そしてそれは、「清滝や」という初句を残すことに支障があったからだと考えざるべきである。さらに、そうであれば、芭蕉が「大井川」から再び「清滝や」に戻した理由が探られねばならない。私は「清滝や」の改作について、支考が記した以外の理由があったと考えている。それは、支考の記録に落ち度があった

わけではなく、芭蕉が言わなかったからだと考えられる。本稿で、その理由をひとつ加えるならば、ここまで述べてきたように、「浪」と「塵なし」の矛盾に芭蕉が心を痛めていたという可能性である。芭蕉は「目に立てて見る塵もなし」との等類を理由として挙げた。しかしそれがすべてではなかった。

最晩年の芭蕉のかたわらに支考がいなければ、後代の者が末期の芭蕉の姿を知ることには、ほとんどなかった。もちろん、其角は支考以外の者から事情を聴き取って終焉の記録を残したであろうし、去来も同様であったろう。支考が芭蕉の傍らで記録を取らなかったのであれば、誰か別の門人がその役割を買って出たかもしれない。しかし支考のレベルで記録を残すことはできなかっただろう。いずれにせよ、支考の果たした役割はきわめて大きかったが、そのことと記録の内容がどれほど真実を伝えているかは別の問題である。ただし、支考がいなければ芭蕉の最晩年を記した多くの記録が存在しなかったということだけは確かである。

ところで「青松葉」も、端的にいえば「落葉」であり「散る葉」である。春を待ち、夏になって、次の世代の成熟を待ち、青いままの姿で散る松葉。その含意が青々とした若葉を思わせる「青松葉」という表記とはそぐわないためか、芭蕉も俳諧師としての経歴（現在知られる限りの芭蕉句）の範囲で、わずかにこの一度しか使っていない。蕉門の俳諧師たちをはじめ、芭蕉につづく俳諧師たちにも「青松葉」の用例は極めて少ない。芭蕉句を一日吟じなければ口から荊が生えたとまで言い、芭蕉の枯野を踏襲して「蕭条として石に日の入る枯野かな」などと詠んだ蕪村³⁰さえ、芭蕉最後のこの発句を踏襲して「青松葉」を詠むことはなかったし、芭蕉のおよそ二十倍、総計二万句もの発句を残した一茶にしても、「掃初ていく代になりぬ青松葉」(「享和句帖」)という発句で青松葉を一回詠んだだけである。

ちなみに、「杠(樑)」^{ゆずりは}という植物がある。現在は福島県から沖縄県にまで広く分布するとされる常緑広葉樹であるが、春になると若葉の生育を待っていたかのように、冬のあいだ散らずに残っていた古い葉が一齐に散るといふ特性を有している。そのような習性から、前の世代が後の世代にみずからの生命や活躍の場を譲るようだとすることで、「ゆずりは」という名がついたといわれている³¹。

青松葉もそれとよく似た習性を持ち、冬を過ごす間も散らずにいた松の葉が春になって若い葉が生い立つのを待っていたとでもいうように青いままで散るために、「青松葉」という特別な呼称を以て呼ばれたのである。これは、次の世代に席を譲るといふ意味と、若くして(青いままで)散るといふ夭折の意味を、ふたつながらに包摂した呼称である。あるいはまた、青い松葉に火をつけて燻すと独特の刺激臭をもった煙が濛々と立ちのぼるために、悪疫や狐憑きなどの災厄を払うための呪具にも用いられてきた。そこには、魔除けとして知られる柘と同じように、松葉の先端で邪物を突くという魔除けの意味合いも含まれていたのだろう³²。

このように世代交代の象徴である青松葉が、芭蕉にとつて、あとに残してゆく門人たちの精進への祈りを込めたメッセージでなくて何であるのか。逝去の前日から食を絶ち、身を清めるといふ備えは当時決して珍しいことではなかったが、それでも誰もがすることではなかった。其角の『枯尾華（芭蕉翁終焉記）』によれば、汚れを憚つて親しい者たちをみずからの病臥する一部屋に入らせなかったという芭蕉は、特にこの時点において「身を清める」ことを強く意識していた（ただし、其角が芭蕉のもとに駆け付けたのは、まさに絶食を始めた十月十一日のことであり、これは伝聞による情報であり、入室の禁止は必ずしも事実ではない）。すなわち邪物を払う呪物としての青松葉を最後に詠むことで、芭蕉は自らの俳諧、その俳業を清めようとした可能性がある。このような特別な一句を、ただ単なる旧作の改作として扱ふことには大いに疑問がある。では支考は、なぜそのような芭蕉の真意を記さなかったのかという疑問が呈されるであろう。確かに九月初旬に芭蕉のいる伊賀上野に馳せ参じて以来、一か月以上にわたつて（さらには没後も）芭蕉周辺の動向を記録し続けてきた支考であるが、その間の芭蕉の心意に関しては推測で述べられたことも少なくなかったと考えられる。

芭蕉が、この間の支考のはたらきに対して大いに感謝しつつ亡くなったことは間違いないとしても、支考にどれほどの真意を吐露していたかということになると疑問が持たれる。支考が『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』の両日記に記したことの中には、憶測によつて書かれたと判断せざるをえない部分も散見される。其角は『芭蕉翁終焉記』に、いわば動的な芭蕉の姿を書き残しているが、九月二十九日（晦日）以降の芭蕉は沈黙を続ける時間が長かったと考えられる。「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」についても、「清滝や波にちり込青松葉」についても、その意味で支考の記録に芭蕉の真意がどれだけ書かれているかは心もとない。³³

七、おわりに

「青松葉」とは、新芽が出るのを待つていたかのように夏に青いままで散る松葉のことであるから、むしろ季節を無化し、逆行した植物の象徴といえる。そして、そこにこそ「あすは棕難波の枯葉夢なれや」との深いつながりが認められる。

五月五日という、まさに夏のさなかに、芭蕉は「難波の枯葉」を思つて「あすは棕」という発句を詠んだ。そのことを「夢なれや」と夢想に託せば託すほど、「枯葉」の實在感は際立つのである。ちまきを包む青々とした葦の葉も、秋になれば枯葉となる。³⁴ そんな夢のような時空

のなかに自分は生きているのだという感慨を、三十代なかばにして芭蕉は詠っている。それは、いわば西行の「津の国の難波の春は夢なれや
 芦の枯葉に風渡るなり」という時間感覚を反転させて受け止めた句であった。西行は能因の「心あらむ人に見せばや津の国の難波あたりの春
 の景色を」を受け取り、「心ある人」のひとりとして春を待つことを望んでいた。若き俳諧師である芭蕉は、そのような季節の受け渡しを心
 から楽しんでいたのである。

しかし、元禄七年の秋をようやく越えて冬にたどり着いた芭蕉は、次の春にはもう出会えないことに気づいている。そうであれば、せめて
 新芽である後進の成長を願って、青々としたままで散っていきたい。そう願ったのではないだろうか。

短か夜を駆け抜けるように沈んでゆく「夏の月」ではなく、最後に芭蕉は「青松葉」を選んだ。自らの再生よりも、自らにかかわった人々
 の将来を願った、それはいかにも芭蕉らしい選択であったといえるだろう。

注

(1) 「あすは粽」ということで、五月五日を翌日に控えた四日の詠と考えられる。ちなみに、この句が収められている『六百番誹諧発句合』には、「富士
 士の雪慮生が夢を築かせたり」も載る。本稿で論じることのできなかつた芭蕉の夢に関して別稿を用意している。

(2) 翌年の可能性もあるが、以下に述べるような理由で、この年の可能性が高いと考えられる。なお、梅人の『桃青伝』に延宝六年の芭蕉の歳旦帳を
 所持しているという記録があることから、井本農一氏は前年に芭蕉が宗匠となった可能性を指摘された『校本芭蕉全集』第九巻「芭蕉評伝」、富士
 見書房、一九八九年)。

(3) 芭蕉の事蹟は、主に今栄蔵『芭蕉年譜大成(新装版)』(KADOKAWA、二〇〇五年)に従う。以下同様。

(4) 『風俗文選』は岩波文庫版(岩波書店、一九二八年)に拠り、読みやすさを優先して適宜表記に改変を施した。以下同様。

(5) 『奥細道菅菰抄』は、大内初夫編著『奥細道菅菰抄(勉誠社文庫)』(勉誠出版、一九八四年)に拠る。

(6) 『筠庭雜録』は、『日本随筆大成(新装版)』第二期七(吉川弘文館、一九九四年)に拠る。

(7) 喜多村筠庭(節信)については、大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成2(復刻版)』(名著刊行会、一九七八年)などを参照。

(8) 宗因及び季吟の事蹟は、尾形佑・島津忠夫監修『西山宗因全集・第五巻(伝記・研究篇)』(八木書店、二〇〇四―一七年)、島内景二『北村季吟

この世のちの世思ふことなき（日本評伝選）（ミネルヴァ書房、二〇〇四年）などを参照。

(9) 拙稿「芭蕉最晩年の難波の句」（『岡大國文論稿』50、二〇二二年）。また、拙稿「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」考——「枯野」は河内野ではなかったか——（『日本文学』70-4、二〇二二年）では、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」が従来西行の「津の国の難波の春は夢なれや葦のかれ葉に風わたるなり」（『新古今集』）を典拠とするとされているが、むしろ同じ西行の「朽ちもせぬ其名ばかりをとどめ置きて枯野の薄形見にぞ見る」（同前）との関わりが深いであろうと述べた。この点については稿を改めて論じたい。

(10) 拙稿「令和三年度解釈学会全国大会（第五十三回）研究発表報告「清滝や波にちり込青松葉」考——支考と去来の証言を検証する——」（『解釈』第六十七巻第九・十号、七二二集、二〇二二年）を先に執筆したため、本稿の表題を「清滝や波にちり込青松葉」再考」とする。

(11) ただし、『諸注評釈 新芭蕉俳句大成』（明治書院、一九九四年）にはそのような指摘を行なった前例は載らない。大津の義仲寺での埋葬を望んだこともあり、実際に葬儀や追悼行事の多くは近江で執り行なわれたこともあって、芭蕉が難波（御堂筋花屋仁右衛門方）で没したことは偶然の客死であったという見方が強かった。もちろん偶然であったことは間違いない。書簡によれば芭蕉は早晚難波を去って伊勢や伊賀に移動することを希望し、さらには将来的に肥前長崎までの大吟行を行なうことを希望していた。難波はたまさかの中継地であり、芭蕉自身最期の地とは意識していなかった。しかし難波でこの世を去ることを覚悟した時、芭蕉はその地に運命を見いだし、その意味を刻もうとは思わなかっただろうか。それこそが「旅に病て」であり、その一方で俳業そのものの意味を刻みつけようとしたのが「清滝や」であったと考えるのである。

(12) 注(9)の拙稿「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」考」参照。なお、「西行の歌は謡曲『蘆刈』などを通して呼び込んだもの」との指摘がある（加藤秋邨『芭蕉全句・上』筑摩書房、一九六九年）。

(13) 堀切実・田中善信・佐藤勝明編『諸注評釈 新芭蕉俳句大成』（「あすは粽難波の枯葉ゆめなれや」の項、稲葉有祐氏執筆）を参照。

(14) 『芭蕉講座』第四巻「発句・連句の鑑賞」（有精堂、一九八三年）は、「あすは粽」が西行歌の本歌である能因の「心あらむ人に見せばや津の国の難波あたりの春の景色を」（『後拾遺集』）までを「視野に入れた作」であるとすると、「発句の鑑賞」永野仁氏執筆）参照。そうであれば、そこには「自らが居ない季節を詠む」趣向が包摂されている。なお、同じく『後拾遺集』には和泉式部の「津の国のこやとも人のいふべきにひまこそなけれ葦の八重葦」が載り、「津の国の難波のわたりに家居して住む人ありけり」と始まる『大和物語』第百四十八段を意識している。いうまでもなく注(12)の謡曲『蘆刈』の原拠となった一段である。なお、能因については、主に高重久美著・和歌文学会監修『能因（コレクション日本歌人選）』（笠間書院、二〇二二年）を参照。

(15) 延宝二年の季吟からの『埋木』伝授によって、立机は可能であったはずである。それが三、四年後に至った理由として考えられるのは、(1)実力、(2)門人、(3)資金という三つの要素である。(1)は、連歌俳諧の秘伝書の伝授が行われたのだから季吟は芭蕉の力を認めていたのであり、この頃詠まれた芭蕉の発句は未だ談林風の漢詩文調や極端な破調が目立つ以前のもので、当世の水準として問題はない。延宝三年の宗因欲迎の百韻に名を連ねたことが、何よりも俳壇に認められたことを示している。(2)の門人も、すでに身近に素堂がおり、延宝三年には嵐蘭・杉風・蝶舎(のちの其角)が入門するなど多彩な才能を抱えつつあった。このように考えてくれば、やはり問題は(3)の資金であろうか。立机の当時から約四年間、芭蕉が水道(小石川上水)の普請または浚渫工事におそらく現場監督として携わったことが知られているし、延宝二年、四年と帰郷を重ねたのも、金策が主要な目的であったと考えられないではない。

(16) 芭蕉最晩年の記録としては、最期の一か月余り芭蕉に伺候した支考の『芭蕉翁追善之日記』や『笈日記』、逝去五日前の十月七日に参上した去来の『旅寝論』や『去来抄』、逝去前日に駆け付け支考への聞き書きを基に執筆した其角の『枯尾華(芭蕉翁終焉記)』のほか、最晩年の芭蕉から破門を解かれたと伝わる路通の『芭蕉翁行状記』などがあるが、いずれにも一長一短があつて使用には注意を要する。赤羽学『芭蕉翁追善之日記(岡山大学国文学資料叢書八)』(福武書店、一九七四年)参照。

(17) 注(10)の拙稿「清滝や波にちり込青松葉」考」参照。支考の両日記は「清滝や」の改訂の記事に、十月八日に詠んだ「旅に病て」との関わりを記すことはない。

(18) 注(10)の拙稿「清滝や波にちり込青松葉」考」参照。

(19) そうであれば「枯野」は「難波の枯葉」を踏まえているということになる。芭蕉が「旅に病て」の句に詠んだ「夢」は、旅の人生の総括的な夢であつて具体的な典故はないという考え方より、この考え方は根拠が明確である。「旅に病て」が辞世句ではないのであれば、「あすは粽」と関わる可能性はより高くなるであろう。注(1)に触れた「芭蕉の夢の句」で改めて考察したい。

(20) 注(9)の拙稿「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」考」に述べた。私も「旅に病て」を芭蕉の辞世句と考える説を採らない。

(21) 『芭蕉全発句』上(河出書房新社、一九七四年)で山本健吉氏が「西行の歌は、冬の枯蘆原を眼の前にして、難波の春を回想」するのに対して、「あすは粽」は「夏の青蘆原を眼前にして、かつての「蘆の枯葉」の冬景色」を思い遣るものとする。『芭蕉全句集(角川ソフィア文庫)』(角川学芸出版、二〇一〇年)の「古歌の表現を使いながら一転した句境を示」すという解もあり、芭蕉は西行歌のもつ異なる季節を想起するという機能を俳諧に持ち込んだものと理解できる。すなわち、自らが居ない季節・居ない場所のことを想起して歌・句を詠むことが「夢」なのである。

(22) 注(9)の拙稿「旅に病て夢は枯野をかけ巡る」考」を成稿する過程で、最晩年の芭蕉が、従来言われている以上に、いかに強く詩歌の先達、とりわけ西行を意識しているかを実感した。「旅に病て」が「あすは粽」を介して西行と結ばれていることは間違いないとして、そこにどれだけ「季節の移り」が意識されているかが問題となる。以下、前稿と記述の重なる部分がある。

(23) 「アシ」には「蘆」「葦」「芦」「葭」とさまざまな字体があり、それらの中間的な略字（書体）すら存在する。本稿では、引用等根拠のある場合を除き表記を「葦」に統一して示すこととする。

(24) ただし、すでに『松尾芭蕉集』①（新編日本古典文学全集）（小学館、一九九五年）などに指摘があるように、「悪し」につながる「葦」を、あえて詠まなかったということは考えられる。

(25) ちなみに、中略部分には「東（あづま）の方では、よしともいう」という記述が入る。まさに、葦は西と東を結びつつ区分する「名」を持った植物であった。関西では、「アシ」は「足（お金）」と通ずるため避けられなかったとの一説もある。

(26) 注(11)の『諸注評釈 新芭蕉俳句大成』（月見せよ玉江の芦を刈ぬ先）の項、深沢眞二氏執筆）参照。

(27) 『詩集大阪』（赤塚書房、一九三九年）所収「葦の地方」に「末枯れはじめた大葦原の上に／高圧線の弧が大きくたるんでゐる。」という著名な一節がある。

(28) 笠金村ですら「葦垣の古りにし郷」と詠っていて、それは『万葉集』をさらにさかのぼる歌枕であった。なお、芭蕉遺語に「正風俳諧は万葉集の心なり。されば貴となく賤となく味うべき道なり」があるとされるが、出典は明らかではない。『俳諧大辞典』（明治書院）は「一葉集」が「右の條々祖翁口訣と云」として「俳諧は万葉集の心也。されば貴となく賤となく味ふべき道也」を収録して以来の伝承とする。「正風俳諧」としたのは誰であるかは知らないが、これが流布したのは、芥川龍之介が「芭蕉雜記」（『新潮』一九二三年一月～二四年七月連載）に「芭蕉は子弟を訓へるのに「俳諧は万葉集の心なり」と云つた」と記してからであろう。

(29) 高精度計算サイト (casio.jp) 「KEE-SAN」による。 <https://keisan.casio.jp/>

(30) 現在の東京の十一月の平均気温一五・五度に対して江戸は一・八度。江戸時代後期の数値ではあるが、ほぼ現在の三月の平均気温に相当する。気象庁HPなど参照。

(31) 「難波の葦」は、『小倉百人一首』にも採られた伊勢の「難波潟短き葦の節の間も逢はでこの世をすぐしてよとや」（『新古今集』）によって人口に膾炙することとなった。

- (32) 芭蕉が難波を詠んだ発句は暗峠を越える九月九日の「菊に出てならと難波は宵月夜」(元禄七年九月二十三日付、猿雖・土芳宛書簡に初出)と前年(元禄六年)冬に酒堂に宛てて贈られた「難波津や田螺の蓋も冬ごもり」の二句がある。両句の検討については別稿を期したい。
- (33) 『万葉集』には笠金村の長歌が八首収められるが、「笠金村の歌は天皇の行幸従駕時の儀礼歌でありながら、天皇や朝廷そのものの権威はあまり前面に出さずに土地の美しさや豊かさを表現した土地讃めに焦点が置かれている」との指摘がある。ウェブサイト「万葉集入門」(解説・黒路よしひさ) http://manyoubunlab.tn.chukyo-u.ac.jp/manyousyu6_920.html
- (34) 拙稿「くらがり越え」の旅―芭蕉はどのように旅に生きたか―(『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』24、二〇二二年)。
- (35) 赤羽学『芭蕉俳諧の精神拾遺』(清水弘文堂、一九九一年)第一章第五節「芭蕉の木曾義仲への共感」など参照。
- (36) 拙稿「笈の小文」と『平家物語』―「須磨のあまの矢先に鳴かほと、ぎす」考―(『岡大國文論稿』24、一九九六年)を同様の視点から論じた。
- (37) 支考の記録によれば、芭蕉は改訂の理由として九月二十七日に園女亭で詠んだ「しら菊の目にたて、みる塵もなし」という発句を挙げ、等類を避けるための改訂という理由を述べている(『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』)。
- (38) 注(34)の拙稿参照。
- (39) 田中洋巳「藤原定家の「藤河百首」について」(『岡山大学文学部紀要』58、二〇二二年)。
- (40) 草野隆「藤原定家『藤河百首』考」(『星美学園短期大学研究論叢』38、二〇〇六年)。
- (41) 『藤河百首』二二七、注(39)の田中氏論文二二九頁参照。
- (42) 『新古今集』二七・春歌とて。伊藤伸江「心敬の句表現―「青し」の系譜から―」(『日本文学』66―7、二〇一七年)三九頁参照。
- (43) 九鬼清「心敬と芭蕉―その芸術理念を中心として」(『和歌山大学学芸学部学芸研究』1、一九五〇年)、岡本彦一「心敬と芭蕉」(『論究日本文学』1、一九五四年)など。
- (44) 「うるせし」の語釈は各種国語辞典、主に『大辞泉』を参照した。
- (45) 注(42)の伊藤氏論文参照。
- (46) 注(10)の拙稿「清滝や波にちり込青松葉」考」参照。
- (47) 注(42)三九―四〇頁参照。
- (48) 「塵なし(き)」の対象が月の面おもてであると説く向きもあるが、前節に述べた先行歌との関わりからも、その対象は水面(川面)であろう。

(49) 注(10)の拙稿「清滝や波にちり込青松葉」考」参照。その最大の理由は、先行する定家・西行・長嘯子らの詩歌との関わりによってであると考えられる。

(50) 芭蕉と異なり、蕪村は他にも「石に詩を題して過る枯野哉」「馬の尾にいばらのかゝる枯野哉」「暮まだき星の輝く枯野かな」「子を捨る藪さへなきて枯野かな」「大とこの糞ひりおはず枯野かな」「真直に道あらはれて枯野かな」「三日月も異にかゝりて枯野かな」「むさゝびの小鳥食み居る枯野哉」など多くの枯野の発句を詠んでいる。芭蕉への敬慕ゆえであらう。

(51) 岡山県の西北の隅に位置する新見市には杠城と呼ばれる山城があり、この地域では「ゆずりは」の祝意を受け継いで、衣食住の随所にこの名を伝えてきた。新見市報道委員会『ふるさと探訪』（岡山県新見市、一九八四年）など参照。

(52) 粽に用いる笹が、まさにそのような植物である。柏の葉にも杠や松と同じく新芽の生育後に枯れる習性があるが、子孫繁栄を願って柏の葉を用いた柏餅の起源は徳川九代・十代の家治・家斉の頃（十八世紀）とされており、そうであれば芭蕉の時代には存在しなかったと考えられる。

(53) 多くの先人が芭蕉の真意の奈辺にあったかを斟酌しようと試みてきたが、当然のこととはいえ、いずれも推測の域を出ない。それは十月に入ってからのが去来をはじめとする古参の門人たちへの態度との比較から伝わって来るものでもあった。

(54) 表日本では笹の生育が見られず、粽には茅や葦が用いられたとされている（服部保・南山典子・澤田佳宏・黒田有寿茂「かしわもちとちまきを包む植物に関する植生学的研究」『人と自然』17、二〇〇七年）。そうであれば「あすは粽」に詠われた「粽」は葦の葉で包まれており、「難波の枯葉」にそのままつながる。植生学的な葦の分布やその利用実態に関しては未だ知識が伴わないため、以上を記して今後の課題とさせていただきます。